RFQ STRUCTURE IN KEK

T. Kato, Z. Igarashi, K. Ito, C. Kubota, Y. Mori, A. Takagi, E. Takasaki, T. Takenaka, S. Fukumoto, Y. Higashi, T. Hongo and D. A. Swenson^{*} National Laboratory for High Energy Physics

ABSTRACT

B - 2

We made a plan of constructing an RFQ linac which will accelerate H⁻ ions of 25kev to 750kev at the rf test stand in KFK. Computer program 'QKEK' was developed. QKEK gives useful parameters of RFQ linac such as cell length, bore radius, modulation factor, vane voltage and particle energy by calculation of motion of a stable particle. It also includes six dimensional beam dynamics calculation and produces an output tape of vane geometry for machining by numerical milling machine. Parameters of RFQ linac were determined by the use of QKEK and SUPERFISH. A first model vane was machined in KEK workshop and satisfactory results were obtained.

§1. 序

KEKでは 偏極陽子前段加速器計画、及びH加速計画が始まっている。 その スタートの時期が早かったためもあって、前段加速器は、Cockcroft-Walton 型を使用 して、150 ker まで加速し、linac へ入射する計画となっているが、最近注目されてい るRFQリニアックの可能性を調べて、将来の発展性を探るために、RFQモデルlinac を試作することにした。 折よく、200 MHz で出力 2.5 MWを有するRFテストスタン ドは、今年度中に完成の見通しであり、又Hイオン源は明調に開発されているので、空洞 の低レベルRFテストに加えて、ビーム加速テストの条件も整っている。こうした条件に より 試作空洞の周波数は200 MHz に選んだ。

\$2. 理論

2-1 基本式

RFQリニアックの理論は、文献(1)(2)に詳しいので、ここでは空洞設計上 必要な 式を列挙する。 notation は 文献(2)と 同じである。

$$U = \frac{\nabla}{2} \left[X \left(\frac{Y}{\alpha} \right)^2 \cos 2 \psi + A I_0 (kr) \cos kz \right] \sin(\omega t + \phi) \qquad (1)$$

$$Er = \left(-\frac{X\nabla}{\alpha^2} r \cos 2 \psi - \frac{kA\Psi}{2} I_1(kr) \cos kz \right) \sin(\omega t + \phi) \qquad (2)$$

$$E\psi = \frac{X\nabla}{\alpha^2} r \sin 2 \psi \sin(\omega t + \phi) \qquad (3)$$

$$E_{-} = \frac{kA\Psi}{\alpha^2} I_1(kr) \sin(\omega t + \phi) \qquad (3)$$

$$E_{z} = \frac{kAV}{2} I_{0}(kr) \sin kz \sin(\omega t + \phi)$$
(4)

*Guest from LASL, Los Alamos.

-93-

$$A = \frac{m^2 - 1}{m^2 I_0(ka) + I_0(mka)}$$
(5)

$$X = 1 - A I_0(ka)$$
(6)

$$k = \frac{2\pi}{\beta\lambda}, \quad r_0 = \frac{a}{\sqrt{x}}, \quad B = \frac{e\lambda^2}{mC^2} \cdot \frac{X \nabla}{a^2}$$
(7)

$$\frac{\beta\lambda}{2}$$

2-2 コンビュータープログラム

RFQリニアックの形を計算し、6次元粒子のdeam dynamicsを計算するプログラム"QKEK"を開発した。初期入力パラメータは、E(Z)、P(Z)、最小半径Qo、

最大modulation Mo, 入射エネルギー Win 等 である。 このプログラムでは、安定粒子の軌道を 計算して、各セルの長さ、粒子の energy 毛 遂次 決定する。次に、加の及び Qoを用いて、ベインの間の 電圧を求め、そのあと E(z)=子(KAP)を解いて、 各セルの加及び Qを決定する。 又、製作の上で 必要となるベインの形状は、 KEK保存の Numerical Machine 用のプログラムに変換後、紙テープに打ち 出す。最近LASLのRFQ計算プログラム― PARMTEQーがKEKにて動くようになり、QKEK との比較が可能となった。 PARMTEQの特徴は radial focussing parameter $B(z) \in \mathcal{M}(z) \in \mathcal{M}(z)$ 入力パラメータに用いていることである。同じB(Z) を用いた両者の計算結果は、一致していろと言える。 ある周波数における ベインの 断面形状は、SUPER-FISHにより計算される。 必要な exciting power, surface peak field 等についての 情報も、SUPER-FISHにより得られる。

2-3 計算結果

Table 1 及び Fig.1 に基本パウメータを示す。 focussing parameter Bを linac内で 定数 に保つかどうかは、重要な選択となる。QKEKは 入力パウメータを E(E)で 与えているので、一般 には B≠ const. となる。 Fig.1 のパウメータでは 6.4≦ B≦ 8.1 となっている。 B≠ const. は 平均半径 ro ≠ const. を導くから、 rf 特性の 点からの考慮が、必要となる。

-		Construction of the local diversion of the	
	Frequency	201.08	MHz
	Input energy	25	kev
	Output energy	750	kev
	Number of cells	138	
	Length	121	cm
	Initial radius	1.5	cm
	Minimum radius	0.4	cm
	Initial modulation	1.0	
	Final modulation	2.0	
	Initial phase	-90°	
	Final phase	-30°	
	Vane voltage	104	kv
	Max. surface field	25	MV/m
	Final accel. field	1.9	MV/m
	Exciting power	70	kw
	Capture efficiency	96	%
	Acceptance	0.34	$\pi cm, mrad$

Table 1 RFQ parameters.



-94-

もうーッの重要なパラメータは、放電に関係する peak surface field である。 表の 値 25 MV/m は、Kilpatrick field limit⁽³⁾の1.7倍である。 Fig.2に、SUPERFISH によって得たベイン上の表面電場の分布を示す。 このベインに おいては、Esurface ~ 1.33 V/ro が得られた。

Fig. 3に input energy に対する capture efficiency, Fig. 4に phase oscillationを 示す。 25 kev における capture efficiency は 96%であり、エ^{ムW}/Win ~ 10% に わにって、90%以上の 効率を得ている。

Fig. 5に SUPERFISHの計算に用いたベインの形を示す。 Fig. 6にベインの間の運圧 を100kvに normalize する時に必要な exciting power Pcと共振周波数とを、ベインの 角度のの関数として示す。

§3. ベインの製作

Table 1にあげたパラメータのもとに、入射部分から40cmのベインを、銅を用いて 試作した。 KEKにある N.C. - FANUC 220A (J 5um/one pulse の精度を持っている。 送り速度 300mm/min,ボールエンドミルの半径5mm,軸方向のpitch (J 0.5mmとした。 この部分の最大の modulation (J、1.08 である。 modulationのピーク値の計算値 とのズレの測定結果を Fig. 7 に示す。

〈参考文献〉

- I. M. Kapchinskii and V. A. Teplyakov, "Linear Ion Accelerator with Spatially Homogeneous Strong Focussing", Prib. Tekh. Eksp. No.2,19(1970).
- K. R. Crandall, R. H. Stokes and T. P. Wangler, "RF Quadrupole Beam Dynamics Design Studies", 1979 Linear Accelerator Conference, p.205.
- 3. W. D. Kilpatrick, "Criterion for Vacuum Sparking Designed to Include Both rf and dc", RSI <u>28</u>(1957)824.





Fig. 2 Surface electric field on yane,

Fig. 3 Capture efficiency ys input energy.

-95-



Fig. 4 Phase Oscillation.



Fig. 5 Vane geometry.











